

宮澤賢治『虔十公園林』の文学性

澤田文男*

Literature nature of children's story "Kenju park forest"

Fumio Sawada

要約

作品『虔十公園林』は、虔十が植えた杉の苗が、彼の死後二十年近く経過して杉林に成長し、「子どもたちの美しい公園地」となる話である。

植林という営為は、大であれ小であれ、木と土を熟知した者の手によるはずであるが、その視点からすればこの人物による植林は不思議な結果をもたらしている。

この不思議さを作品の核として考察することを通じて、宮澤賢治の文学性の一部を探ってみたい。

キーワード：ジョニー・アップルシード、遠山正瑛、エルゼアール・ブフィエ、虔十、デクノボー、本統のさいはひ、十力

(Abstract)

Work "Kenju park forest" is, cedar seedlings Kenju was planted, and have passed close after his death two decades to grow in cedar, a story that becomes the "Children of beautiful park land".

Act of planting, whether any small at large, but should by the hand of those who were familiar with the trees and soil, if from the point of view, afforestation by this person has brought to mysterious results.

Through it to consider this mystery as the nucleus of this work, I want to explore a part of the literature of Kenji Miyazawa.

Keywords : Jonny Appleseed, 遠山正瑛, Elzeard Bouffier, Kenju, Dekunobo, Real fortune, Juriki

* 提出年月日2014年11月28日、高松大学発達科学部准教授

1 『りんごの木を植えた男』 ジョニー・アップルシード

ジョン・チャップマン (John Chapman) というより、通称・愛称の「ジョニー・アップルシード (Jonny Appleseed)」は、りんごの木を植えた男として、アメリカ合衆国開拓時代の伝説の、しかし、実在の人物であることがよく知られている。

その伝説や実像について知りたければ、大賀睦夫氏の『ジョニー・アップルシードの宗教』と題された香川大学経済論叢 (2003年3月) を一読するとよい。題名のとおり、アップルシードの、

「今日では真偽の判断を下せないアップルシードのエピソードもいろいろ伝わっているが、大筋のところははっきりしている。彼はスウェーデンボルジャンであり、清貧な生活に甘んじ、荒野に40年以上リンゴの木を植え続けた。実際にアップルシードはそのような生涯を送った人物だったのである。」

「彼は西部のすみずみに行ってリンゴの木を植えたという※ディズニーの話はもちろん誇張で、実際には彼の果樹園はほぼオハイオとインディアナに限られている。」

※1948年のディズニー映画『メロディ・タイム』

「またジョニーはもっとも初期のアメリカのスウェーデンボルジャンであり、熱心に新教会の伝道活動をした。彼の主要な活動は、開拓者の家に『天界と地獄』などのスウェーデンボルグの著作をおいていくことだった。」

といった実像が、アップルシードにまつわる映画、詩歌、手紙、報告書、地方史の書物、新聞の紹介記事などの丁寧な考察を通じて浮き彫りにされている。

さて、この大賀氏の論を座標の一つに設けて、1992年に発刊された『りんごの木を植えた男』(詩／リーブ・リンドバーグ 絵／キャシー・ジェイコブセン 訳／稲本 正アーバン・コミュニケーション刊)の巻末に掲載されているリーブ・リンドバーグの詩では、アップルシードをどのような人物として描いているか、いわば、事実がどのように物語となるかを簡単に考察してみる。

この詩中の少女ハンナ・グッドウィンの眼を通して描かれているアップルシードの特徴は以下のようなものである。

背中にリンゴの種を入れた袋を負い、手には聖書を持ち、顔はやせ、裸足で、身に着

けた衣服は古くて擦り切れていた。

- ・ A sack of seeds upon his back,
A Bible in his hand.
- ・ His face was thin, His feet were bare,
His clothing old and worn.

彼は、開拓時代の西部であっても、銃やナイフといった武器は帯同していない。どんな生き物からも害を受けたことはなく、それらは神の子だからであると考えている。

- ・ He carried neither gun nor knife,
No weapon did he own.
- ・ He said he'd harm creature born,
Each one was God's own child.

さて、彼自身が語る自らの営為、りんごをアメリカ各地で配布したり、植え続ける理由は、りんごはこの国を富ませ、強くするであろうし、それは神の贈り物であるからである。

- ・ He said his apple, sharp and sweet
Would make the country strong.
- ・ He said he'd bring them apple tree,
Our Lord's gift to the earth

だから、彼の種が大きく育ち、収穫を得たハンナが感謝をしても、それは神のなせる業であると考えている。

- ・ He said no thanks were owe:
- ・ The Lord had made them all

この詩では、アップルシードは聖書を信仰し、神の意思に従い、万物の性善を信頼し、アメリカを富む国にしようと努力し、清貧の、開拓者の信望熱い人物として描かれている。(その信仰については「聖書」とだけふれられている。)

2 「砂漠にポプラの木を植えた人」 遠山正瑛

欧米の実在のモデルを最初に挙げてみたが、次に、目を度十と同様の国内に転じてみよう。そのサンプルはたくさんあるが、比較的新しい例を挙げてみる。

たとえば、遠山正瑛氏（1906年～2004年）（以下、敬称略）は、1972年鳥取大学農学部教授を退官後、72歳のとき、日本からボランティアを募集し、数十人とともにクブチ砂漠でポプラの木を植え始めた。この営みは、現在も引き継がれ、木が木立となり、森林となって、農業生産の地となっている。

日本沙漠緑化実践協会HP掲載の協会の概要には次のように記されている。

日本沙漠緑化実践協会は1991年2月、遠山正瑛初代会長（鳥取大学名誉教授）が中心となり設立された沙漠緑化活動を中心とする団体です。2012年6月に「特定非営利活動法人 日本沙漠緑化実践協会」として設立認証され、NPO法人としての活発な活動を行っています。日本沙漠緑化実践協会は、地球環境問題の一端の取り組みとして、主に中国・内モンゴル自治区のクブチ沙漠（ゴビ沙漠）における沙漠緑化活動に取り組んでおります。沙漠緑化活動は、ボランティアによる「緑の協力隊」として毎年現地に派遣され、2013年10月までに「緑の協力隊」参加者は11,700名、植林木数は373万本となり不毛の沙漠に緑の森林を出現させ、多くの農作物等が生産されるようになりました。遠山初代会長が「我々は沙漠を研究するのではない、沙漠を緑に変える実践をする団体なのである」、「やればできる、やらなければ何もできない」と常に言い続けた言葉が、近年少しづつ現実の姿になりつつあります。」

遠山正瑛もアップルシードと同様、志と実践の实在の人物である。

3 フィクション『木を植えた男』エルゼアール・ブフィエ

三例目は、『虔十公園林』と同様のフィクションを取り上げてみる。

フランスの作家ジャン・ジオノによって1953年に発表された『木を植えた男』では、人知れず荒野で植樹を続ける男、「エルゼアール・ブフィエ」によって森が再生していく様子を作者である「私」が回想として記されている。

こうした体裁から、当初は作中のブフィエを实在の人物として受け止める反応が多かったようだが、紆余曲折を経て、現在では特定のモデルも無くフィクションとしてよく理解されている。

1987年に、ジオノの小説を原作として、カナダのアニメーション作家フレデリック・バック監督・脚本で同名の短編アニメ“L'Homme qui plantait des arbres”が発表され、日本では、1980年代後半から1990年代前半にかけて、日本語訳版がLD・VHSで販売された。2000年代以降はDVD化もされたこともあって世界中で人口に膾炙しているといっ

ていだろう。

そのプフィエなる人物像を『木を植えた男』（原作者＝ジャン・ジオノ 画化＝フレデリック・バック 訳者＝寺岡 襄）に依ってスケッチしておこう。

巻頭に、

人びとのことを広く深く思いやる、すぐれた人格者の行いは、
長い年月をかけて見定めて、はじめてそれと知られるもの。
名誉も報酬ももとめない、まことにおくゆかしいその行いは、
いつか必ず、見るもたしかなあかしの、地上にしるし、
のちの世の人びとにあまねく恵みをほどこすもの。

とあり、この文章が、「カシワ」や「ブナ」、「カバ」などの木を植えた男への讃頌となっている。

そのプフィエは、一人息子と奥さんを失った後、山深い荒野の羊小屋に一人、清楚な生活を営み、「何かためになる仕事をしたい」と思い立ち、「神につかわされた闘技者のごとく」「魂の偉大さのかけにひそむ、不屈の精神」と「心の寛大さのかけにひそむ、たゆまない熱情」によつて、二度の世界大戦も知るか知らずか、木を植え続ける。その種が芽吹き、木立ちが林へ、森林へと成長し、「風が種をまきちらし、水がふたたび湧きだすと、柳は芽をふきかえし、小さな牧場や菜園や花畑がつつぎに生まれて、生きる喜びがよみがえり、「道々のいたるところで、若い男女が笑い、陽気な声をあげている。かつての村人たちにくらべたら、見ちがえるほどなごやかな心で、人びとは生活を楽しんでいる。」こうして「荒れはてた地を、幸いの地としてよみがえらせた」彼は、養老院で「やすらかにその生涯を閉じた。」

このフィクションでは、植林は地域の一部の補助的な効果ではなく、全体を産みなおす最大限の効果、すなわち荒涼とした貧しい山間の地を人々が生活を楽しむ幸いの地として再生するほどの力を発揮している。

4 植林という営為

このように木を植えた人、あるいは植林の物語は、実在・非実在、国内外を問わず、また一つの地域や一つの海岸線、ひとつの村落など、その規模の大小、あるいは防風、

防砂、防潮、緑化、水資源の涵養、気候調節、土地改良、農業振興、殖産興業などと、理由に関わらず、他にも散見する。いわばその地域の特性に応じて工夫される人間の生存の営為といえよう。

そうして、成功したほとんどの事例は、事前に習得した学識や事上に経験を積んだ豊富な体験を踏まえ、それぞれに理由と目的を抱いて合理的に植林を実践したものである。

5 「虔十」という人物

さて、長々と、実在、非実在を問わず、木を植えた人々を見てきた目で、虔十を見つめてみたい。

虔十はいつも縄の帯をしめてわらって杜の中や畑の間をゆっくりあるいているのでした。

雨の中の青い藪を見てはよろこんで目をパチパチさせ青ぞらをどこまでも翔けて行く鷹を見付けてははねあがって手をたたいてみんなに知らせました。けれどもあんまり子供らが虔十をばかにして笑うものですから虔十はだんだん笑わないふりをするようになりました。

風がどうと吹いてぶなの葉がチラチラ光るときなどは虔十はもううれしくてうれしくてひとりでに笑えて仕方がないので、無理やり大きく口をあき、はあはあ息だけついてごまかしながらいつまでもいつまでもそのぶなの木を見上げて立っているのです。

というように、「雨の中の青い藪」や「青ぞらをどこまでも翔けて行く鷹」、風に吹かれて「ぶなの葉がチラチラ光る」など生き生きとした自然の現象、しかし、自然の豊かな農山村部では特に珍しいわけでもなく、むしろありふれた光景に過ぎないものにもかかわらず、虔十の嬉しさ、喜びは「はねあがって手をたたいて」みたり、「いつまでもいつまでも」「見上げて立っている」という様で、それはまるで歓喜であり、陶酔であるようだ。

おそらく「わらって杜の中や畑の間をゆっくり歩いてゐる」折も、自然に対する歓喜や陶酔が胸に溢れているのであろう。それは、同じ自然を対象として働きかけた結果、

作物が豊かに実ったという勤勉な農民の、自然の恩恵を前提にした歓喜ではなく、都会生活者の安息や慰安としての陶酔でもない。そういったあらゆる意味での利益や実効とは関係をもたない歓喜と陶酔である。

その日はまっ白なやはらかな空からあめのさらさらと降る中で、慶十がたゞ一人からだ中ずぶぬれになって林の中に立ってゐました。

「慶十さん。今日も林の立番だなす。」

蓑を着て通りかかる人が笑って云ひました。その杉には鳶色の実がなり立派な緑の枝さきからはすきとほったつめたい雨のしづくがポタリポタリと垂れました。慶十は口を大きくあけてはあはあ息をつきからだから雨の中に湯気を立てながらいつまでもいつまでもそこに立ってゐるのでした。

とあるように、自然そのものへの歓喜と陶酔を抱く人物である。

さらに、

その芝原へ杉を植えることを嘲笑ったものは決して平二だけではありませんでした。あんな処に杉など育つものでもない、底は硬い粘土なんだ、やっぱり馬鹿は馬鹿だとみんなが云って居りました。

それは全くその通りでした。杉は五年までは緑いろの心がまっすぐに空の方へ延びて行きましたがもうそれからはだんだん頭が円く変って七年目も八年目もやっぱり丈が九尺ぐらいでした。

と、農村社会の常識的な知識や感覚には違和や嘲笑をひきおこし、人々から、

その慶十という人は少し足りないと思つていたのです。いつでもはあはあ笑っている人でした。

と馬鹿にされる様子も重ね合わせると、慶十という人物には、賢治の粗末な手帳に書き付けられた『雨ニモマケズ』の一節を想起して妥当であろう。

ミンナニデクノボートヨバレ

ホメラレモセズ
クニモサレズ
サウイフモノニ
ワタシハナリタイ

また、隣家の平二の妨害や嫌がらせに対し、

「虔十、貴さんどごの杉伐れ。」

「何してな。」

「おらの畑あ日かげにならな。」

虔十はだまって下を向きました。平二の畑が日かげになると云ったって杉の影がたかで五寸もはいつてはいなかったのです。おまけに杉はとにかく南から来る強い風を防いでいるのです。

「伐れ、伐れ。伐らないが。」

「伐らない。」虔十が顔をあげて少し怖そうに云いました。その唇はいまにも泣き出しそうにひきつっていました。実にこれが虔十の一生の間のたった一つの人に対する逆らいの言だったのです。

ところが平二は人のいい虔十などにばかにされたと思ったので急に怒り出して肩を張ったと思うといきなり虔十の頬をなぐりつけました。どしりどしりとなぐりつけました。

虔十は手を頬にあてながら黙ってなぐられていましたがとうとうまわりがみんなまっ青に見えてよろよろしてしまいました。すると平二も少し気味が悪くなったと見えて急いで腕を組んでのしりのしりと霧の中へ歩いて行ってしまいました。

という顛末の中で、「実にこれが虔十の一生の間のたった一つの人に対する逆らいの言」から想像される人物像に加えて、

「買ってやれ、買ってやれ。虔十あ今まで何一つだて頼んだごとあ無いがったもの。買ってやれ。」と云いましたので虔十のお母さんも安心したように笑いました。

という「杉苗七百本」を母親にねだった際のお父さんの言葉も重ね合わせると、やはり、『雨ニモマケズ』の一節が想起される。

慾ハナク
決シテ瞋ラズ
イツモシズカニワラッテキル

さて、この節で見てきたように、信仰に基づく自らの希求する生き方が表明されていると考えられる『雨ニモマケズ』には、虔十という人物にいわゆる仏教の「三毒の煩惱」、「貪」を否定し、「瞋」を否定し、「癡」を否定する姿勢が意識的に具体化されている。

6 虔十公園林までの経緯とその意図

ある年、山がまだ雪でまっ白く野原には新らしい草も芽を出さない時、虔十はいきなり田打ちをしていた家の人達の前に走って来て云いました。

「お母、おらさ杉苗七百本、買って呉ろ。」

と、なぜ杉なのか、なぜ七百本なのか、目的や計算も表されないまま、また、土壌や樹木についての知識も経験も無いままに植え付ける行為は、同じフィクションの『木を植えた男』エルゼアール・ブッフエの姿勢、「何かためになる仕事をしたい」と思い立ち、「神につかわされた闘技者のごとく」「魂の偉大さのかげにひそむ、不屈の精神」と「心の寛大さのかげにひそむ、たゆまない熱情」により「荒れはてた地を、幸いの地としてよみがえらせた」とはかけ離れた、というより対極的なものという印象が強い。

さらに比較してみると、先に見たジョニー・アップルシードは果樹園業者、遠山正瑛は元鳥取大学農学部教授、フィクションだがブフィエは元農場主であり、何十年も植林を続けてきた熟練者であり、彼らの植林の成功には当然のことながら意志のみならず、知識が必須であることは疑いを挟む余地は無い。

しかし、この思慮の足りない思い付きのような行為は、当の虔十自身が驚く結果、

ところが次の日虔十は納屋で虫喰い大豆を拾っていましたが林の方でそれはそれは大さわぎが聞えました。

あっちでもこっちでも号令をかける声ラッパのまね、足ぶみの音それからまるでそこら中の鳥も飛びあがるようなどっと起るわらい声、虔十はびっくりしてそっちへ行ってみました。

すると愕ろいたことは学校帰りの子供らが五十人も集って一列になって歩調をそろえてその杉の木の間を行進しているのです。

全く杉の列はどこを通っても並木道のように見えた。それに青い服を着たような杉の木の方も列を組んであるいているように見えるのですから子供らのよろこび加減と云ったらとてもありません、みんな顔をまっ赤にしてもずのように叫んで杉の列の間を歩いているのです。

その杉の列には、東京街道ロシヤ街道それから西洋街道というようにずんずん名前がついて行きました。

という、子供たちの格好の遊ぶ場となる。

その虔十の林は、「虔十が死んでから二十年近くなる」ある日、自分も子供の頃ここで遊んだ経験のある「その村から出て今アメリカのある大学の教授になっている若い博士」によって、

あゝ全くたれがかしこくたれが賢くないかはわかりません。たゞどこまでも十力の作用は不思議です。

と意義づけられている。つまり「デクノボー」虔十の馬鹿な行為は、実は小賢しい「癡」とらわれている私たち人間の及ばない「十力の作用」によって「いつまでも子供たちの美しい公園地」となるのである。

であれば、隣家の平二の嫌がらせや妨害、近隣の農民のからかい、虔十が「チブスにかかって」死んだこと、周辺の近代化にもかかわらず「どう云ふわけかそのまゝ残って居り」、「みんなで売れ売れと申したさうですが年よりの方がこゝは虔十のたゞ一つのかたみだからいくら困っても、これをなくすることはどうしてもできない」と、虔十の林が「やっと一丈ぐらゐ」で「もとの通り」残っているのも陰に陽に「十力の作用」に含めてもいいかもしれない。

7 十力の作用

十力とは、仏教用語で「仏が全智者であることを示す十種の力」（中村元『仏教用語大辞典』）であるが、賢治はこの「十力」について『十力の金剛石』では次のように具体化している。

あゝ、そしてそしてその十力の金剛石は露ばかりではありませんでした。碧いそら、かゞやく太陽、丘をかけて行く風、花のそのかんばしいはなびらやしべ、草のしなやかなからだ、すべてこれをのせになう丘や野原、王子たちのびろうどの上着や涙にかゞやく瞳、すべてすべて十力の大宝珠でした。あの尊い舍利でした。

あの十力とはだれでせうか。私はやっとその名を聞いただけです。二人ともまたその名をやっと聞いただけでした。けれどもこの蒼鷹のやうに若い二人がつゝまし草の上にひざまづき指を膝に組んでゐたことはなぜでせうか。

この圧倒的な「おゝ、あめつちを充てる十力のめぐみ」は、そのまま人間の生を支え、包み、エネルギーとなる根源的な力を有するものとしてあらわれている。

『虔十公園林』においても、

全く全くこの公園林の杉の黒い立派な緑、さわやかな匂、夏のすゞしい陰、月光色の芝生がこれから何千人の人たちに本統のさいはひが何だかを教へるか数えられませんでした。

というように、虔十という人物の植林を通してあらわれた十力が人々によるこびを与える力の根源であることが示唆されている。すなわち「本統のさいはひ」とは「癡」なる人間の小賢しい知恵ではなせる業ではなく、『虔十公園林』の場合、「テクノボー」の行為を通じてあらわれる十力のもたらすものである。

8 「虔十」という名前の意味

先の『十力の金剛石』は、まず主人公が「王子は霧の中ではあはあ笑って」いて、虔十と等しい感覚または思考を所有していること、第二にもう一人の登場人物である大臣の子もまた「霧の向こふのお日様をじつとながめて立ってゐました。」というように

虔十に共通するものを有している。この二人の人物が、十力の金剛石を目撃した際、「つゝましく草の上にひざまづき指を膝に組んでゐた」という行動をとる。「つゝましく」……十力の前に敬虔であること。これはそのまま虔十の姿勢であろう。「『虔十』という主人公の名前を賢治が、自分の名を意識しつつ付けたことは疑いを容れない」という先行研究の指摘のみならず、「虔十」とは、十力に対し、敬虔であれとの賢治の希求も込められていることを指摘しておきたい。

人々に「本統のさいはひ」をもたらす十力の前に敬虔であることによってはじめて十力があらわれるとすると、ごさかしい人智を棄て、十力の作用である自然の変化、自然の姿を目前にして法悦を感じる姿こそ虔十の「うれしくてうれしくてひとりでに笑へて仕方ない」様子であろう。

ヒドリノトキハナミダヲナガシ
サムサノナツハオロオロアルキ
ミンナニデクノボートヨバレ

という『雨ニモマケズ』にみえる姿勢は、まさしく愚かしく、また役立たずであるとの認識のもと、十力に身を任せてつつしむ賢治の祈念の姿勢と思われる。

9 十力と科学

とはいえ、賢治の生地、岩手県は東北の冷涼で山地の多い、稲作に多難な地である。隣人の苦難を目にすれば、拱手傍観ではすまぬ、小賢しい人智といえどもなにかしかなの力を尽くすべき、理想的な仏国土ならぬ人の世である。もちろん、賢治自身が、盛岡高等農林学校で学び、後に稲作指導・肥料設計・農事指導に奔走し、農民の「もっと明るく生き生きと生活する道を見付け」ることに文字どおり心身を張った活動は周知のとおりである。こうした科学という方法については、たとえば『グスコブドリの伝記』の主人公にみてみよう。

「イーハトーブの大きな森のなか」にグスコブナドリという木樵りの子として生まれたグスコブドリの一家が、冷害のため、離散する。その地域ではその後も冷害や干ばつ、火山噴火などが続く。(こうした背景には、賢治が目撃した冷災害に喘ぎ疲弊する農民の生活が反映されているだろう。) 曲折を経てクーボー大博士の学校で見いだされ、

ターボー大博士の火山研究（理論）とそのエンジニアアシスタント（臨床）、ペンネン老技師の指導の下、火山局で「夜も昼も一心に働いたり勉強し」、ざまな科学知識を習得し、「イーハトーブの三百幾つの火山と、その働き工合は掌の中にあるやうにわかつて」くるほど習熟する。遂にはカルボナード島の火山を「今すぐ噴かせ」る必要があると判断し、自らの発意により死を覚悟でカルボナード島に一人残る。その結果、

気候はぐんぐん暖かくなつてきて、その秋はほぼ普通の作柄になりました。そしてちやうど、この話のはじまりのやうになる筈の、たくさんのブドリのお父さんやお母さんは、たくさんのブドリやネリといつしよに、その冬を暖かいたべものと、明るい薪で楽しく暮らすことができたのでした。

と、多くの人々の幸せに貢献する。つまり『グスコープドリの伝記』では、「本統のさいはひ」をめざすため、十力に敬虔な「デクノボー」の姿勢ではなく、科学を方途として人智を尽くすのである。

こうして『十力の金剛石』から『虔十公園林』へ、さらに『グスコープドリの伝記』を繋ぎ合わせてみると、賢治にとって、信仰は、人間存在と世界の在り方を深く認識するものであり、十力は、愚かしい人間存在を救済する優れた力であり、そのことを前提にしてはじめて、科学は、人間にとって「本統のさいはひ」に向かう方途であったのではないだろうか。

注 引用した賢治作品は、すべて「新校本宮澤賢治全集」(1995年11月25日初版)による。

執 筆 者 紹 介

O.Baterdene	モンゴル国	経済開発省	投資政策局	主 任	教 授
丸山 豊史	高 松 大 学	経 営 学 部		主 教	授
山口 直木	高 松 大 学	経 営 学 部		准 教	授
岡本 丈彦	高 松 大 学	経 営 学 部		助 教	授
澤田 文男	高 松 大 学	発 達 科 学 部		准 教	授
津村 怜花	高 松 大 学	経 営 学 部		准 教	授
花城 清紀	高 松 大 学	経 営 学 部		助 教	授
藤井明日香	高 松 大 学	発 達 科 学 部		講 師	
岡 耕平	滋 慶 医 療 科 学 大 学 院 大 学			講 師	
川崎 紘宗	高 松 大 学	経 営 学 部		講 師	
竹内 由佳	高 松 大 学	経 営 学 部		助 教	授
向居 暁	高 松 大 学	発 達 科 学 部		准 教	授
森 享子	高 松 大 学	経 営 学 部		非 常 勤 講 師	
井上 範子	高 松 短 期 大 学			教 授	
小西 博子	高 松 短 期 大 学			准 教	授
藤井 雄三	高 松 短 期 大 学			講 師	
溝 利博	高 松 大 学	発 達 科 学 部		准 教	授

研 究 紀 要

第62・63合併号

平成27年2月25日 印刷

平成27年2月28日 発行

編集発行

高 松 大 学

高 松 短 期 大 学

〒761-0194 高松市春日町960番地

TEL (087) 841-3255

FAX (087) 844-4759

印 刷

株式会社 美巧社

高松市多賀町1-8-10

TEL (087) 833-5811